国立西洋美術館寄託フランク・ブラングィン版画104点の来歴について

佐藤みちこ

I.

現在国立西洋美術館の寄託作品となっている、フランク・ブラングィン Frank Brangwyn(1867-1956)のエッチング及びリトグラフ104点は、1985年に東京国立博物館から寄託された[1]。この作品群は版画としては大判であること、そしてブラングィンという画家の名前が日本では一般にあまり知られていないことから、近年まとまって公開されることはなかった[2]。また東京国立博物館へ入った経緯、あるいはそもそもいつどのようにしてこれらの版画が日本へ将来されたかなど、その来歴の詳細も明らかになっていなかった。

fig.1
フランク・ブラングィン《ディクスミューデの風車》
1908年、エッチング、国立西洋美術館寄託

fig.2
フランク・ブラングィン《ブリタニア号の最期》
1917年、エッチング、国立西洋美術館寄託

fig.1

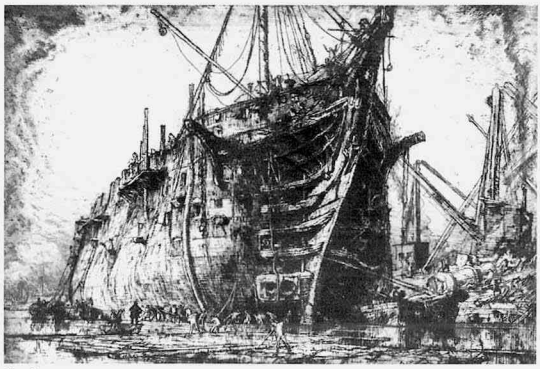


fig.2

fig.3

fig.4

fig.3
フランク・ブラングィン《船を曳く人々》
1906年、エッチング、国立西洋美術館寄託

fig.4
フランク・ブラングィン《アントウェルペンから逃げる難民たち》
1915-16年、リトグラフ、国立西洋美術館寄託

これら104点の版画は、86点のエッチングと18点のリトグラフからなっており、制作年代は1903年から、後段でその時期については詳しく述べることになるが、これらのエッチングが日本に渡った1918年までと特定できる。1903年から1915年までの作品は殆どがエッチングで、主題別にヨーロッパの風景(橋、風車、歴史的建造物など)(fig.1)、イギリスの造船所(fig.2)や炭坑、そこで働く労働者(fig.3)などに大別できる。そして1915年から1917年ごろの作品は、第一次世界大戦の戦場、あるいは難民の姿を描いたリトグラフ(fig.4)が中心である。いずれも大画面であり、紙のサイズが約700×550mmのものが大半を占め、リトグラフについて言えば最大で1530×

1019mmにもなる。

ブラングィンの芸術家としての出発点は1882年ウィリアム・モリスの工房に入ったときに始まった。1891年、グラスゴー・スクールの画家アーサー・メルヴィルとの出会いで風景画に目覚め、作風を大きく変えている。翌年にはミュンヘンのセセッションの通信会員となり、1895年にはジークフリート・ビングの依頼によりパリのギャルリー・アール・ヌーヴォーの壁画を担当、室内装飾に関わる制作が増える。エッチングを始めたのは1900年ごろと言われ、以後、彼の制作活動は油彩による大画面、つまり公共建築を飾る壁画制作

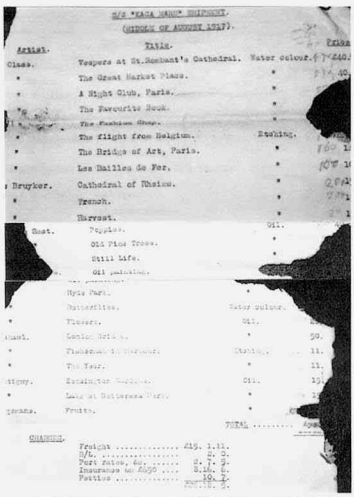


fig.5 輸送リスト・1917年8月加賀丸、石橋家蔵

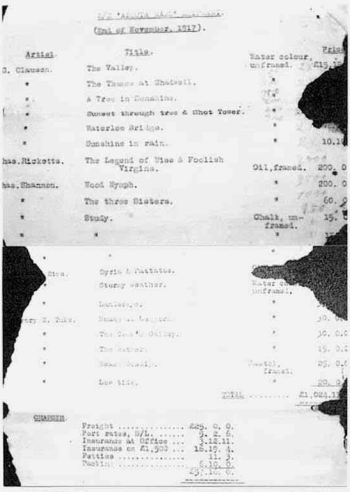


fig.6 輸送リスト・1917年11月熱田丸、石橋家蔵

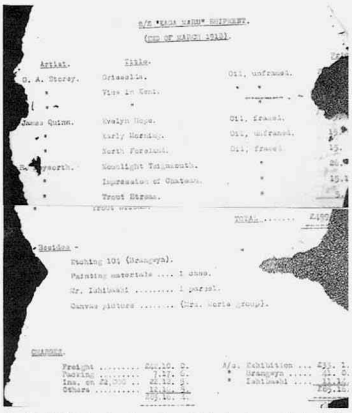


fig.7 輸送リスト・1918年3月加賀丸、石橋家蔵

S/S "KAGA MARU"SHIPMENT
(MIDDLE OF AUGUST 1917).

fig.5の覆刻(筆者作成)

凡例
[ ]内は鉛筆による書き込み。
欠損あるいは判読不能な部分は
…で示した。

Artist.	Title.		Price.	
Claes.	Vespere at St. Rombant's Cathedral.	Water colour	[530]	£40-
"	The Great Market Place.	"	[530]	40-
"	A Night Club, Paris.	"		-----
"	The Favourite Book.	"		-----
"	The Fashion Shop.	"		-----
"	The flight from Belgium.	Etching.		-----
"	The Bridge of Art, Paris.	"	[160]	14-
"	Les Bailles de Fer.	"	[100]	10-
Bruyker.	Cathedral of Rheims.	"	[200]	15-
"	Trench.	"	[200]	15-
"	Harvest.	"	[20-]	15-
---Smet.	Poppies.	Oil.		-----
"	Old Pine Trees.	"		-----
"	Still Life.	"		-----
"	Oil painting.	-----		-----
-----	Hyde Park.	"		-----
"	Butterflies.	Water colour.		-----
"	Flowers.	Oil	[260]	20.--
---haud.	London Bridge.	"	[600]	50.--
"	Fisherman in Harbour.	Etching.	[200]	11.--
"	The Year.	"	[200]	11.--
---tigny.	Kensington Gardens.	Oil	[200]	15.--
"	Lake at Battersea Park.	"	[150]	15.--
---gemane.	Fruits.	"		------

TOTAL.	£57---

CHARGES.	
Freight	£15.1.11.
B/L.	2.0.
Port rates, &c.	2.7.5.
Insurance on £650	8.16.6.
Petties	10.7.
	£26.18.5.

S/S "ATSUTA MARU"SHIPMENT.
(End of November, 1917).

Artist.	Title.		Price.	
G. Clausen.	The Valley.	Water colour, unframed.	[24]	£15.15
"	The Thames at Shadwell	"		-----
"	A Tree in Sunshine.	"		-----
"	Sunset through tree & Shot Tower.	"		-----
"	Waterloo Bridge.	"	[24]	-----
"	Sunshine in rain.	"	[24]	10.10
---has. Ricketts.	The Legend of Wise & Foolish Virgins.	Oil, framed	[2000]	200.0
---has. Shannon.	Wood Nymph.	"	[3500]	200.0
"	The three Sisters.	"	[1000]	60.0
"	Study.	Chalk, unframed	[150]	15.0
"	"	"		15---
-----Sims.	Syria & Pattatos.	O--------		-----
"	Stormy weather.	Water co--- unframed.		-----
"	Landscape.	"		-----
---enry S. Tuke.	Boats at Leghorn.	"		30.0
"	The Cock's Galley.	"		30.0.0
"	The Bather.	"		15.0.0
"	Beach Gossip.	Pastel, framed.		25.0.0
"	Low tide.	"		20.0
		TOTAL		£1.024.11

CHARGES.	
Freight	£25.0.0.
Port rates, B/L.	5.2.6.
Insurance at Office	3.12.11.
Insurance on £1,500	16.19.4.
Petties	11.3.
Packing	6. 10.0.
	£57.16.0.

fig.6の覆刻(筆者作成)

S/S "KAGA MARU"SHIPMENT
(END OF MARCH 1918).

Artist.	Title.		Pr---
G. A. Storey.	Grisselda.	Oil, unframed.	-----
"	View in Kent.	"	-----
"	"	"	-----
James Quinn.	Evelyn Hope.	Oil, framed.	-----
"	Early Morning.	Oil, unframed	15.0
"	North Foreland.	Oil, framed	15.0
R. ---yworth.	Moonlight Teignmouth.	"	26.--
"	Impression of Chateau.	"	15.1-
"	Trout Stream.	"	5.--
		TOTAL	£499---

-Besides-

Etching 104 (Brangwyn).	
Painting materials	1case.
Mr. Ishibashi	1 parcel.
Canvas picture	(Mrs. Moris group).

CHARGES.			
Freight	£ 42.10.0.	A/c. Exhibition	£ 33.1---
Packing	7.17.6.	" Brangwyn	41.0---
Ins. on £2,000	22.12.5.	" Ishibashi	11.14---
Others	12.16.5.		
	£ 85.16.4.		£ 85.16---

fig.7の覆刻(筆者作成)

と、エッチングでの田園風景、あるいは都市風景の細密描写に二分されていく。1912年、パリのデュラン・リュエル画廊で版画の展覧会を行い、ベルギー象徴派の詩人エミール・ヴェルハーレンの好評を得たことで版画家としての評価が安定したちょうどそのころ[3]、ブラングィンの版画104点が日本にまとめてもたらされたのである。

筆者は、フランク・ブラングィンと親交のあった明治期の洋画家石橋和訓(1876-1928)の研究から、石橋が大正期に英国より将来し東京帝室博物館に寄贈したブラングィン版画の存在を知った。そのきっかけは、石橋家に現存する輸送リスト(fig.5-7)、そしてブラングィンに言及した多数の雑誌記事であった。そこには1918(大正7)年6月に日本橋三越呉服店で開催された「欧州大家絵画展覧会」なるイギリス・ベルギー美術の展示即売会のことが記されており、この展覧会についての情報が、結果的には、半ば忘れ去られてしまった104点の作品のタイトル決定や来歴についての手がかりとなった。

作品そのものへのアプローチは東京国立博物館へ特別観覧を申し込んだことから始まった。その際に国立西洋美術館に寄託されている事実を知ったが、その後同館での調査という幸運に恵まれた。作品に残された書き込みなどが、残された文書からの情報と合致し、これら104点の版画作品の全貌がようやく明らかになり始めた。

本稿では、104点のブラングィン版画が日本に将来された経緯を、協力者である石橋の残した文書資料および当時の美術雑誌など二次的資料を手がかりとして明らかにしたい。今回調査を行った国立西洋美術館寄託のエッチングに関しては、まず基本文献であるウィリアム・ゴウントのカタログ・レゾネをもとにイメージの対照を行い、英文タイトルを決定した[4]。そしてリトグラフについてはブリュージュのブラングィン美術館のカタログより同定した[5]。(この104点の全タイトルについては、改めて作品データと共に紹介することとし、ここでは作品一覧は示さない。)和文タイトルはこうして決定した英文タイトルを邦訳したものである。

最後に、この日本では他に例を見ないまとまった数のブラングィン版画のコレクションが、日英美術交流の文脈で、あるいは国立西洋美術館の母体となった松方コレクションを論じるときにどのような意味を持つのかを検討したい。(なお、本論文の中では、引用文中の旧漢字は新漢字に改め、仮名づかいは旧仮名のままとした。)

II.

ブラングィン版画104点が日本に将来され、最終的に東京帝室博物館に所蔵されることになるまでには、ロンドンの日本人画学生とブラングィンとの出会い、交流の長い歴史があった。多岐にわたる分野で多くの作品を残しているブラングィンだが、西洋美術の移入に積極的であった近代日本美術史上においては、彼の名前は随所に登場する[6]。例えば栗原忠二[7]、高木背水、武内鶴之助[8]を指導したと言われることの他に、バーナード・リーチのエッチングの指導者であった事実などは今では意外に知られていない。松

方幸次郎と「共楽美術館」を構想したことは周知のことであろうが、ブラングィンがその親日家ぶりから想像できないほど現在の日本で半ば忘れ去られた画家となってしまったことの理由の一つは、この「共楽美術館」構想の失敗であり、今一つは、松方コレクションのイギリスでの蒐集に携わったであろう彼の業績が、作品倉庫の火災ですべて失われてしまったという不幸である[9]。なお、松方の美術館構想および倉庫火災については湊典子氏が詳細な研究を行っている。[10]

石橋はどのような経緯でブラングィンのエッチングを日本に持ち帰る計画をたてたのであろうか。まず石橋の経歴を簡単に説明すると[11]、1876(明治9)年6月に島根県で生まれ、少年時代は地元で南画を修めた。1893(明治26)年11月に上京し、翌年から本多錦吉郎のもとで洋画の習修も始める。1903(明治36)年12月に上杉憲章のロンドン留学の随行員として中條精一郎らとともに渡英し、ロイヤル・アカデミー・スクールに入学する。そこで主に肖像画を修め、在英日本人画家として文展に出品しながらイギリスでも評価されるようになる。1918(大正7)年2月には渡英後15年ぶりに帰朝し、美術雑誌にイギリスの画壇の動向を紹介するなどの紹介活動を活発に行う。この帰国は第一次世界大戦の戦禍を避けるという目的もあった。1920(大正9)年に再び渡英するが、1923(大正12)年には帰国するという短い滞在であった。その後は帝展に各界著名人の肖像画を出品し、帝展の審査員をもつとめるが、1928(昭和3)年5月に52歳で死去した。

石橋とブラングィンの出会いは渡英後のことであると思われるが、正確な時期は特定できない。松方とブラングィンの出会いの場面にも石橋は登場し、そのいきさつについては、越智裕二郎氏によれば次の2説がある。[12]

1.石橋和訓を介して(藤本光城の松方幸次郎伝[13]より)。

2.ブラングィン宅に下宿していた日本人と、当時日本大使館に勤めていた松方の兄正作が知り合い、その縁で弟の幸次郎とブラングィンの接点ができた(ロドニー・ブラングィンによるフランク・ブラングィン伝[14]より)。

1の前段階として、越智氏は高橋精一の回想録にも言及しており、それによると、山中商会の岡田友次を通じて高橋は、石橋和訓、リケッツ、シムズ、シャノンそしてブラングィンと知り合ったという[15]。藤本光城の松方幸次郎伝の記述では、この出会いが1914(大正3)年の第1次大戦勃発直後のこととして描かれている。また、矢代幸雄の回想録にも1921(大正10)年頃松方とブラングィンが共に連れだって絵画の買い付けに出かける場面が登場する[16]。湊氏によれば、松方は4度目の渡欧(1916年3月～1918年11月)の半ばにブラングィンに共楽美術館の設計を依頼、ブラングィンは1918年になってからその設計に着手し、1919年の秋には日本にいる松方のもとへ設計図を送ってきたという[17]。その図面を見ながら開いた会合に石橋が出席していたという記載が、1919(大正8)年11月28日の『黒田清輝日記』にある。

「松方幸次郎君ノ希望ニ因リ三田ノ邸ニ於テ美術館建設ノ為メブラングィン氏ノ原図ニ基キ相談会催サル　午餐ニ集リタルハ　松方氏兄弟三人ヲ始メ大江新太郎氏　リーチ氏[18]　正金ノ南条氏及ビ侯爵夫人ノ肖像揮毫中ノ石橋氏ト拙者ヲ合セテ八名ナリ」[19]

これらを総合すると、ブラングィンの作品が紹介された1918(大正7)年頃は、ブラングィンをとりまく日本人の往来が最も活発であった時期であると言えるだろう。

このような時期にフランク・ブラングィンの版画104点が日本に将来されたのである。第一次大戦終結後、戦時中滞っていたモノとヒトの交通が堰を切ったように再び流れ始めるのはこのころであり、日本と西洋の美術交流という文脈においても、看過できない重要な時期である。

それでは、この1918(大正7)年のブラングィン作品の将来、そして「欧州大家絵画展覧会」はどのような経緯で実行されたのだろうか。

石橋家所蔵の石橋和訓関係書簡の中に、1918(大正7)年前後に頻繁に手紙をやりとりしていた「南條金雄」という人物の書簡がいくつか含まれていた。この人物は当時三井物産に勤務しており、ロンドンに赴任していた。南條から石橋宛の書簡でブラングィンの名前が出てくるのは、まず1918年2月4日付けの手紙で、「森氏家族カンバスも加賀丸で積出パトリツクソン、ブーレーは交渉いづれも間に合ふかと心配　ブラングキンエッチングも加賀丸にて積出して仕舞ふ」というくだりである。この記述を裏付けるような輸送リストが関係書簡の束に混じって残っている。それは「S/S "KAGAMARU" SHIPMENT. End of March 1918」(fig.7)というものであり、ここに「Besides/Etching 104(Brangwyn)」という決定的な記載が見られる。なお、このリストの他に、同様の書式であと2枚の輸送リストが残っている。それぞれ「S/S "KAGA MARU" SHIPMENT(Middle of August 1917)」(fig.5)「S/S "ATSUTA MARU" SHIPMENT (End of November 1917)」(fig.6)と書かれており、「Artist/Title/Price」を列挙してある。[20] これら3通のリストから石橋が荷出しに関わった状況が推察できる。初めに発送されたものが1917年8月中旬であり第2便が1917年11月末であること、第3便が1918年3月であること、当時イギリスから日本への船旅には約1カ月を要したことを考え併せてみると[21]、石橋の帰国は1918年2月であるので、石橋がイギリスを発ったのが1月ごろとなり、最初の2便だけは石橋の手配したものであった可能性がある。もちろん石橋がイギリスからの帰路、他国も回っていたとすれば、イギリスを発ったのはもう少し早い時期であったかもしれない。今の所、この記録が、ブラングィン版画将来に関わる最も早い時期のものであり、石橋が帰国前に展覧会の手配を済ませ、あとの発送を南條に任せて慌ただしく帰国し、帰国後ようやく全出品作品が届いたという状況が窺えるのみである。それ以前の石橋のメモ、あるいは彼の発言について触れた記事などが発見されていないため、計画段階の状況については今のところ不明である。

しかしながら、上に挙げた証拠により、石橋がこの展覧会のコーディネイトの主役であったことは間違いないと思われる。

III.

日本に到着したイギリス、ベルギーの作家たちの作品は、1918(大正7)年6月1日から10日までの10日間、日本橋三越呉服店新館5階で展示された。

この展覧会については、三越呉服店が発行した『三越』第8巻第6号(1918年6月号)が展覧会目録の役割を果たし、出品作家から出品作品に至るまで、詳細に記載している。それによれば、この展覧会は2部に分かれ、第1部がベルギー人画家7名とイギリス人画家8名による油彩・水彩・素描・版画全53点の展示即売となり、第2部がブラングィンの版画104点の展示となっている。第1部について見ると、いずれも当時人気のあった画家たちであり、英国側はロイヤル・アカデミー会員が名を連ねている。ブラングィン以外の作品については、散逸してしまったため消息が確認できていないが、図版とタイトルから判断して、風景画が多い。

本稿で取りあげた国立西洋美術館寄託の104点のブラングィン版画については、全作品にタイトルが記載されている。先述した輸送リストには「Etching 104」としか書かれていなかったので、この『三越』が唯一の当時の情報となる。本稿の冒頭で述べた方法によりタイトルを決定した後に、この『三越』に載ったタイトルと照らし合わせてみると、そこに見られる1918年当時の日本語タイトルはほぼゴウントの和訳と重なっている。ゴウントのレゾネが1926年、つまりブラングィンの生前に本人の確認のもと出版されていることを考えると、1918年の日本での展覧会のタイトルはブラングィンの承諾を得て決定されたものだと分かる。翻訳は石橋の手によるものであろう。また、『三越』に見られるブラングィン作品のナンバリングだが、これは作品の左下隅に残っている鉛筆の書き込み(fig.8)と一致する。書き込みは二つの番号から成っており、最初に書かれた番号には消線がひかれ、それから1つひいた数が残っている。この若い方の番号が即ち展示の順番である。

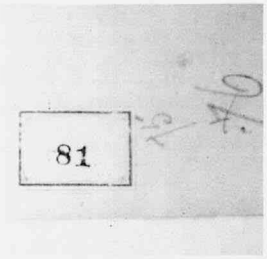


fig.8
作品への書き込み

ブラングィン以外の出品作家については、先述の輸送リストから判読できる名前をまず書き出し、それを『三越』で確認するという方法を採ったところ、輸送リストで読みとれる名前と作品数は以下の通りである。なお、作品名は割愛した。

「Claes(8), Bruyker(3), Smet(4), 不明(3), ---haud(3), ---tigny(2), ---gemane(1)」(以上1917年8月の加賀丸)「Clausen(6), Ricketts(1), Shannon(4), Sims(3), Tuke(5)」(以上1917年11月の熱田丸)「Sorey(3), Quinn(3), ---yworth(3)」(以上1918年3月の加賀丸)

これら3通のリストに載った名前は合計15名、作品数52点である。一方『三越』には「エヅアール・クラエス(8)、ヂュール・ド・ブリュツケル(3)、レオン・ド・スメエ(3)、マルセル・ヂェツフリー(4)、ジョーン・ミシヨー(3)、ジャンネー・モンテニュー嬢(2)、モーリス・ワーゲマン(1)[以上白耳義] ヘンリー・エス・チューク(5)、ジョーヂ・クラウゼン(6)、チャアレス・リツケツト(1)、チャアレス・シャンノン(5)、チャアレス・シムズ(3)、ジョーヂ・エー・ストーレー(3)、ジェームス・クイン(3)、アール・ヘエウォース(3)[以上英国]」と15名53点が記載されている。輸送リストと3点の異同があるが、これらは紙面が破れて判読不明だったジェッフリーの1点であろう。これら53点の作品についても、輸送リストの英文タイトルと『三越』の和文タイトルは、内容から見てほぼ完全に一致する。

以上検討してきた「輸送リスト」は、図版では判読不能と思われるので、46-47頁に覆刻した。

IV.

作品の特定をひとまず終えたところで、次に問題にしたいのは、展覧会開催の目的についてである。これは不明であった石橋の企画意図とも関わる、最も重要な問題である。

『三越』記事はつぎのような言葉で始まり、この展覧会が第一次世界大戦で難民となったベルギー人画家を救済するためのチャリティーであることを窺わせている。

「本月一日より十日迄新館五階北側に開催さるる同会こそ、わが日本に於いては実に破天荒の世界的な絵画展覧会でございます。そこに展陳さるべき絵画はおのづから二部に分たれて居りまするが、第一部は左記の目録が示す如く、独逸の暴虐の手よりまぬがれ目下英国に避難中の白耳義の著名の画家七大家と、英国現代に最もすぐれたる八大家との作品五十三点より成るもので(後略)」[22]

石橋自身、帰朝後多くの雑誌に英国画壇の近況を伝えている中で、自らの企画したこの「欧州大家絵画展覧会」について『新美術』誌に寄稿している。そこでは戦争の惨禍と、それによる画家の困窮が述べられ、この展覧会開催の背景についての言及がある。

「今回白耳義の画家の製作を多く網羅したのは、英国画壇の大家たるクラウゼン氏やシムス氏が、大に同情して斡旋された為めで、其処へブラングィーン氏がエッチングを寄贈されると云ふ様な事があつたのである。」[23]

ブラングィンがこのチャリティーに賛同したことの背景に、ブリュージュが彼の生地だという事実があるのは、言うまでもないことだろう[24]。彼のベルギーへの思い入れは、非常に強いものであったようで[25]、ベルギーを主題とした油彩、版画作品は数多い。その中でも興味深い作例として挙げられるローレンス・ビニョン著・ブラングィン原画・日本人木版画家漆原木虫[26]彫り/摺りの詩画集《ブリュージュ》は、彼の生まれ故郷へのオマージュと言える。

第一次世界大戦中、ドイツに侵略されたベルギーに対する日本国民の関心は高く、ベルギーを題材とした書物がほかの時期より多く日本国内で刊行されたという。また、戦時中には駐日ベルギー公使館がベルギーの惨状を知らせて義捐金を訴えるキャンペーンを行っていた[27]。また、新聞社の事業の一環として寄付金集めが行われ、たとえば東京朝日新聞1915年2月10日付には「白国同情義金募集」の記事が掲載された。一口50銭を1ヶ月で集めるという社告であった。その他さまざまな機関がベルギーの惨状を伝えると共に寄付を募り、成果をあげていた。「欧州大家絵画展覧会」も、こういった日本からベルギーへの義捐金送付の一環として企画されたことが推察できよう。

実際に、ブラングィンの104点の作品にはこのチャリティーの意図を汲み、戦争の惨禍を表したもの、そして生地ベルギーののどかな田園風景を描いたものが含まれている。これらに限らずブラングィンのエッチング、リトグラフを通観すると、そこにはいくつかのパターンが認められる。シャウ・スパロウの分類を参考にすれば、エッチングでは主題ごとに造船所、労働者・工場、

歴史的な建造物を巡ったイタリア風景、水車・風車などベルギーの風景、フランスの橋、キリスト教的主題、など大別できる[28]。そしてリトグラフは、殆どが戦争風景、孤児などの被災者の様子を描いたものである。104点の版画には、これら典型的な「ブラングィン的テーマ設定」とも言える作例がバランスよく散りばめられており、自選によるものであった可能性を示唆するもう一つの根拠と言える。

ブラングィンの戦争を描いた作品群は、本稿で取り上げる104点の版画の中でも最大(紙1530×1019mm)の《戦災孤児支援ポスター》(fig.9)からも分かるように、明確な社会的メッセージを盛り込んだものであった。第一次世界大戦では多くの戦争ポスターが制作されたが、ブラングィンもその代表的な作家であった[29]。ブラングィンの赤十字への支援は、赤十字社のための「アート・スタンプ」(fig.10)(fig.11)でも分かる[30]。これらは小包郵便などに貼って赤十字の活動を支援していることを示すもので、収益は戦災孤児などへの寄付金にあてられた。fig.10、fig.11ともに国立西洋美術館寄託のブラングィン版画に同じ図様が見受けられる。fig.10は《絶望した囚人》(fig.12)であり、fig.11は《復讐の誓い》(fig.13)である。いずれも1914年から1918年の作と思われ、同じイメージが他にも繰り返し用いられている。例えばブラングィン作のセット販売用の戦争ポスターのカタログもあり、《絶望した囚人》が表紙を飾っている[31]。また、複数作家の競作による戦争ポスター集もあり、例えば《大戦》などは200部限定で売り出されていた[32]。

fig.9
フランク・ブラングィン《戦災孤児支援ポスター》
1915-16年頃、リトグラフ、国立西洋美術館寄託

fig.10
赤十字社アートスタンプ《孤独な囚人》
ウェールズ・ナショナル・ギャラリー蔵

fig.11
赤十字社アートスタンプ《復讐の誓い》
ウェールズ・ナショナル・ギャラリー蔵

fig.9

fig.10

fig.11

fig.12

fig.13

fig.12
フランク・ブラングィン《絶望した囚人》
1914-17年、リトグラフ、国立西洋美術館寄託

fig.13
フランク・ブラングィン《復讐の誓い》
1914-16年、リトグラフ、国立西洋美術館寄託

それでは、この展覧会は観者あるいは批評家にはどのように受け入れられたのであろうか。そしてこの10日間の展覧会は、当初の目的であった「チャリティー」の成果をあげることができたのであろうか。

「欧州大家絵画展覧会」は、開催期間こそ短かったが、作家達の切実な思いが込められたものであり、その誠意は広く受け入れられ、展覧会評もおおむね好意的なものだった。『中央美術』1918年7月号で高村真夫は、専門家にはつまらないと思われ作品購入者には有り難がられたというこの展覧会の評判について、多少皮肉を込めて論じている。

「一体此会の催しは、嘗つて新聞にも記された如く、其国土の凡てを敵中に蹂躙された所の最も哀なる白耳義の避難者として目今倫敦にさすらひ居る所の多くの画人の窮迫を救ふ為めに、英国のアーチストの或一団が義侠的に提供した其作品を日本で売つて其資金を得たいと云ふ美しい慈善的の企てであるから、吾々は普通の展覧会の作品に対する冷酷な批判的な態度を以つて評するのは、寄贈者に対して気の毒な訳でもある。」[33]

『三越』7月号は、展覧会が盛況のうちに終わったことを短く伝えている。

「若し夫れブラングキーン氏が帝室博物館寄附のエッチング百四枚に至つては、世界の珍として、絵画に趣味を有せざる人々でさへ、その前に数十分を費やすを惜しとしない有様でございました。」[34]

さらに同誌は、会場写真として、ブラングィン室の様子を掲載した(fig.14)。これを見ると、壁じゅうに所狭しと飾られた版画の周りを、幾重にも人々が取り囲み、部屋は大変な混雑ぶりである。この展示方法については、先の高村が苦言を呈している。

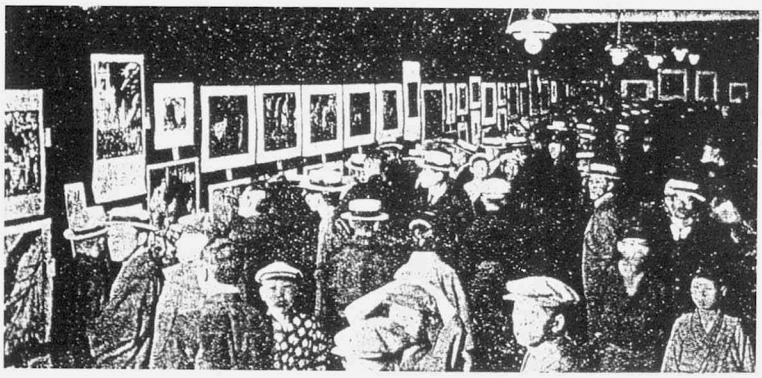


fig.14
「欧州大家絵画展覧会」ブラングィン室の様子

「現代英国に於ける最も大なる画家ブラングキン氏のエッチング百枚が、広告ビラか懸賞の裾模様絵の如く、押し合ひつゝ無惨にも、赤裸の儘で壁に貼付けられてあつたのは如何にも惨酷な芸術虐待であつた。(中略)石橋君とも談じ合つたのであるが、せめて此三分の一位の数にして止めて置いたら、も少しは見好かつたであらうに惜しい事をした者(ママ)である。」[35]

この展示方法の痕跡は現在でも作品に残っており、全作の四隅に画鋲の針穴が見られる(台紙があるものは台紙に、ないものは作品に直接)。

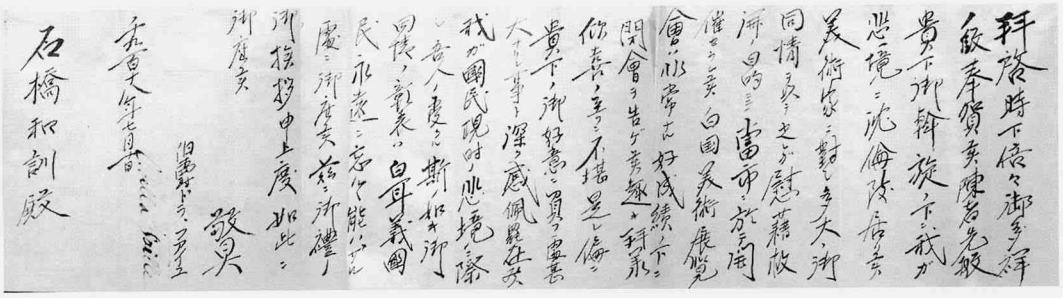
美術批評家たちの受け取り方はさまざまであったが、外交の面ではこの展覧会は高く評価された。それを示す重要な資料が石橋家に残っていた。在日ベルギー公使からの礼状(fig.15)である。ベルギー公使ドラ・ファイユからの、石橋和訓宛1918年7月10日の封書には、「我ガ国民現時ノ悲境ニ

際シ吾人ノ為タル斯ノ如キ御同情ノ彰表、白耳義国民永遠ニ忘ル能ハザル処ニ御座候」などと感謝の意がつづられている[36]。

実際、絵画の売り上げは好調だった模様で、最も高価であったのがシャノンの《森の精》で3500円であり、全作品(ブランギィン以外の、即売された作品)の総額が3万円、そのうち2万5千円は開会直後に売約済みとなったという[37]。ドラ・ファイユからの手紙は、多額の売り上げを寄付したことに対しての礼状であろう。

この展覧会は、果たして後のベルギーと日本の美術交流に何らかの布石となったであろうか。そのことを窺わせる展覧会が1924(大正13)年に東京で開催されていた。大熊敏之氏の研究によれば、「白耳義国寄贈絵画展覧会」と題されたこの展覧会は、1923(大正12)年の関東大震災後の日本を援助する意図でベルギー人作家が義捐金代わりに自らの作品をベルギーの日本大使館に送ってきたことがきっかけだったという[38]。この1924年展が1918年展の「返礼」としての意味を持つかどうかについては、今後の研究の課題として調査を進めたいと思う。

fig.15
ベルギー公使ドラ・ファイユから石橋和訓宛書簡、石橋家蔵



V.

ブランギィンは、冒頭で述べたように大画面の壁画作品と版画という対照的な芸術の媒体を用いていた。流通する芸術作品として版画を大量に制作する一方で、ブランギィンは公共建築物への壁画献納を一種の社会奉仕活動として行った。あるいは、それはブランギィンの名誉欲に訴えたかもしれない。

壁画と版画、この2つの方向性は、彼の二元的な芸術家精神を表しているように思われる。楽天的な、明るい装飾性への憧れと、社会の暗部へのするどいまなざし、そこから来る執拗なまでの描写力。モニュメンタルな側面を持つ壁画では、彼の「装飾的」画風が駆使された(fig.16)。アール・ヌーヴォー風のうねるような曲線と鮮やかな色彩。絡まり合う植物は、見たこともないような熱帯の草花である。一方で彼の版画作品は、重苦しい空気をはらんでいる。解体される大型船舶、廃墟と化した巨大建造物、そして黙々と働く無数の労働者、そういったモチーフは豊かな都市生活の陰にひそむ破壊と再生のイメージを喚起する。そしてまたブランギィンは、第一次大戦に巻き込まれる同時代の人々の苦悩を描くことで弱者への救済を手助けするという「社会事業としての芸術」を実現した画家でもある。

「ふつうの人々への共感や、労働者の英雄化が、ブランギィンの作品の主要なテーマになった」と言われるように[39]、ブランギィンの版画作品には、1920〜30年代のプロレタリア芸術運動にも通じるものがある。また、ブラン

グィン自身この104点のエッチング・リトグラフを「日本にエッチング趣味を扶殖せんが為めに」紹介したということもあり、日本の創作版画運動に与えた影響についても今後詳しく調査する必要があるだろう。

fig.16
フランク・ブラングィン《大英帝国パネル》
1930-32年、油彩、スウォンジー・ギルドホール蔵

国立西洋美術館に寄託されたブラングィンの版画は、純粋な芸術的衝動以上に同時代の社会情勢に敏感であった一人の画家が、ある意志を持って社会の弱者に対する救済の手をさしのべ、自ら慈善事業の企画に参加したという姿を連想させる。フランク・ブラングィンという画家は、松方コレクションのアドヴァイザーであったこと、そして日本人画家の指導および日本人サークルとの積極的な交流から見て、優れたオーガナイザーであったと言える。一方で石橋和訓は、在英の日本人画家として、日本から来る若い画学生と、ブラングィンをはじめとするイギリスの画家とをひきあわせる、いわば仲介者の役割に手腕を発揮していた。この2人の優れたコーディネイターの存在が、ブラングィンの版画104点を現在ある姿に導いたのだと言えるだろう。

ブラングィン版画と松方幸次郎との直接的な関わりを示す資料は今の所見つかっていない。しかし周囲の状況から、完全に無関係とも言えないのである。これら104点の版画が、「正式には松方コレクションの一部分ではない」ということにより、知られざる日英・日本/ベルギーの美術交流の一側面が明らかにされるかもしれない。

最後に、今後の課題を整理しておきたい。一つは、ブラングィンの政治的社会的な活動への参加であり、そしてもう一つは、ブラングィンをはじめとして当時日本で展示されたいわゆる「泰西名画」およびその作家たちの中に、年を経るごとに取捨選択され、当時は有名だったにも関わらず現在その名を知られなくなってしまった者が多いという、日本人の西洋美術に対するテイストの変化である。これらの問題についても今後研究を続けたい。

［付記］本稿執筆に関わる調査にあたりまして、次の方々にご助力頂きました。石橋彰治氏、東京文化短期大学、岩切信一郎先生；静岡県立美術館、越智裕二郎氏；東京国立近代美術館、古田亮氏；日本女子大学、馬淵明子先生；ロンドン大学大学院、吉川珠衣氏；チェルシー美術大学、渡辺俊夫先生；ブラングィン美術館、Dominique Marechal氏；ウィリアム・モリス・ギャラリー、Norah Gillow氏；大英博物館、Stephen Coppel氏、Janet Wallace氏、David Penn氏；ウェールズ国立美術館、Mark Evans氏。また、国立西洋美術館主任研究官、越川倫明氏ほか学芸課の皆様には調査及び本論文執筆に際し格別のご配慮を賜りました。記して御礼申し上げます。

なお、本研究の一部について1998年12月12日に行われた明治美術学会総会に於いて「石橋和訓と大正7年欧州大家絵画展覧会」と題して口頭発表を行いました。発表に際してご配慮頂きました早稲田大学・丹尾安典先生をはじめ、発表後に貴重なご教示を賜りました諸先生方に感謝申し上げます。

（さとう みちこ/筑波大学大学院博士課程芸術学研究科）

[1] 版画104点とともにグワッシュ2点〈Venice〉〈Hammersmith Bridge〉も東京国立博物館より国立西洋美術館に寄託されている。

[2] 東京帝室博物館では、昭和2(1927)年6月21～30日の期間、ブラングィンの版画が公開され、『ブラングキン作エッチング目録』という小冊子も発行された。そこには、公開された50点のタイトルが列挙されている。

[3] Emile Verhaeren, "Frank Brangwyn", *Le Figaro*, Paris, 26 jan., 1912.

[4] William Gaunt, *The Etchings of Frank Brangwyn, R.A. (a Catalogue Raisonne)*, The Studio, London, 1926.

[5] Dominique Marechal, *Collectie Frank Brangwyn Catalogus*, Brugge Stedelijke Musea, Bruges ,1987.

[6] 美術雑誌ではブラングィンの特集が組まれることもあった。例えば織田一磨「英国画家フランク、ブラングィン」(泰西現代巨匠伝叢[三])『美術新報』9巻7号、1910年5月、5-7頁など。

[7] 下山肇「栗原忠二・その芸術の基礎」『静岡の美術 Ⅳ 栗原忠二展』図録、静岡県立美術館、1991年、12-15頁。

[8]山田敦雄「武内鶴之助 ― 眼にうつる風景」『武内鶴之助展』図録、目黒区美術館、1993年、71-74頁。

[9]ブラングィン自身、この火災をひどく嘆き、悔やんでいたという証言がある。William de Belleroche, *Brangwyn's Pilgrimage - The Life Story of an Artist*, London, 1948, p.254.

[10] 湊典子「松方幸次郎とその美術館構想について(上)(下)」『MUSEUM』395/396号、1984年2/3月、31～40頁/27～38頁。

[11]石橋和訓の履歴については、未公刊の伝記である、河邊栄養著「石橋和訓画伯小伝」(石橋家蔵)を参考にした。

[12]越智裕二郎「松方コレクションについて」『神戸市制100周年記念特別展-松方コレクション展』図録、神戸市立博物館、1988年、112頁。

[13] 藤本光城『松方・金子物語』兵庫新聞社、1960年、186頁。(藤本光城「コレクション王 松方幸次郎物語」『都新聞』1957年3月2日～7月12日まで116回連載。)

[14] Rodney Brangwyn, *Brangwyn*, William Kinber, London, 1978, p.211.

[15] 高橋精一「ロンドンにおける松方さん」『川崎重工業株式会社史』所収、1959年、977-978頁。

[16] 矢代幸雄によれば、1921年に初めてロンドンの松方を訪ねた時にブラングィンとたびたび同席したようである。矢代幸雄「松方幸次郎」『芸術新潮』1955年1月号、155-157頁。

[17] 湊典子「松方幸次郎とその美術館構想について」(下)前掲、29頁。

[18]この「リーチ氏」というのは、バーナード・リーチのことである。リーチは当時日本に滞在しており、窯が火災にあってから、東京の黒田清輝邸に身を寄せて新しい窯を作り、そこでしばらく制作していた。

[19] 『黒田清輝日記』中央公論美術出版、1968年、1304頁。

[20] S/Sは、Steam Ship(汽船)の略。

[21] 日本郵船のロンドン定期便は2週に1度の割合で就航しており、平均42日を要した。(湊典子「松方コレクションのイギリス絵画」『神戸市制100周年記念特別展 ― 松方コレクション展』図録、前掲、132頁。)

[22] 『三越』第8巻第6号、1918年6月1日発行、8頁。

[23] 石橋和訓「帝室博物館に寄贈したる英国画家のエッチング～欧州戦場に於ける英国画家の任務～」『新美術』第2巻第7号、1918年6月号、12頁。

[24] フランク・ブラングィンは1867年5月、ベルギーのブリュージュで生まれている。もともとウェールズ系イギリス人の家系であった。父カーティス・ブラングィン(William Curtis Brangwyn 1839-1907)は、ゴシック・リヴァイヴァルの建築家で、ブリュージュにアトリエを構えており、少年時代のフランク・ブラングィンはそこでアーツ・アンド・クラフツの文物に囲まれて育った。一家は1875年にロンドンに転居したが、1905年から1908年までの間、フランクはたびたびブリュージュを訪れている。

[25] 1926年、ブラングィンはリトグラフ、エッチング120点をブリュージュ市に寄贈した。その後1936年には油彩を含む445点をさらにブリュージュ市に寄贈し、それをもとにして同年7月に同市のブラングィン美術館が開館した。同館のコレクションについては、Dominique Marechal, 前掲書を参照のこと。ブラングィンは晩年様々な美術館に自身の作品をまとめて寄贈しており、例えばロンドン郊外ウォーシャムにあるウィリアム・モリス・ギャラリーにも、やはり1936年に寄贈された「フランク・ブラングィン・ギフト」というコレクションがある。詳細は、*Catalogue of Works by Sir. Frank Brangwyn.R.A. in the William Morris Gallery. Walthamstow*, William Morris Gallery, 1974.を参照のこと。

[26] 漆原木虫(1888-1953)は本名由次郎といい、木版画の摺師として1910年日英博覧会での日本木版画実演のために渡英した。その後1912-1919年ごろまで大英博物館で表装や版本の修復などに携わり、1919-1940年にかけて詩画集《ブリュージュ》、《ブラングィン画漆原木虫彫刷・写生帖》などを次々と刊行した。漆原については、以下の論文を参照のこと。
エレーヌ・ゴアルザン「漆原とイサックとシャデル～ヨーロッパにおけるジャポニスムと色彩木版画」『ガレリア通信』No.30、ガレリア・グラフィカ、1996年1月発行、7-15頁。

[27] 磯見辰典ほか『日本・ベルギー関係史』白水社、1989年、288-289頁。

[28] Walter Shaw-Sparrow, *Prints & Drawings by Frank Brangwyn with Some Other Phases of His Art*, London, 1919.の各章の主題を参考に、版画作品を分類してみると、次のようになる。(a) Simple landscape and wayfaring sketches (b)Windmills and watermills (c)A few bridges (d) Barges, boats and hulks (e)Industry and labour (f)Architecture (g)Art and national welfare (h)Peace and war (i)Book illustration and decoration

[29] 第一次世界大戦と戦争ポスターについては以下の論考がある。
Steve Baker, "Describing Images of the National Self: Popular Accounts of the Construction of Pictorial Identity in the First World War Poster", *The Oxford Art Journal*, vol.13:2, 1990, pp.24-30.

[30] Children's Red Cross Fund, "Daily Mail" and "Evening News" By Frank Brangwyn, A.R.A.(カーディフ、ウェールズ国立美術館蔵)

[31] *A Catalogue of War Auto Lithographs Designed by Frank Brangwyn*, The Avenue Press.(カーディフ、ウェールズ国立美術館蔵)

[32] *The Great War, Britains Efforts and Ideals*, The Avenue Press, 1917.(大英博物館蔵)このリトグラフ集は、Effortsの部とIdealsの部の2部に分かれており、Effortsは15×20インチで9枚入りIdealsは20×30インチで12枚入りである。ブラングィン以外の作家では、オーガスタス・ジョン、エドムン・デュラック、チャールズ・リケッツ、チャールズ・シャノンらが名を連ねている。

[33] 高村真夫「欧州大家絵画展覧会を評す」『中央美術』第4巻第7号、1918年7月、65頁。

[34] 「欧州大家絵画展覧会の反響」『三越』第8巻第7号、28頁。

[35] 高村真夫、前掲、70頁。

[36] 日本駐在ベルギー公使 George della Faille de Leverghem (特命全権大使) 1910年12月5日任命、1911年4月着任、1919年5月に後任の公使と交代。(磯見辰典ほか、前掲書、437頁。)

[37] この特別招待日には名士たちが招待され、この日だけで40点売れたという。購入者については「岩崎男、松方乙彦氏、川崎肇氏、今村繁三氏」などが複数購入したとあり、中でも岩崎氏は10点近くも購入したようである。(『三越』第8巻第7号、28頁。)

[38] 大熊敏之「〈白耳義作家寄贈絵画展覧会〉始末～1920年代の日本の洋画壇と近代ベルギー絵画」『三の丸尚蔵館年報・紀要』第2号、1995年度、54-66頁。

[39] Robert John Lamb, *Sir Frank Brangwyn and the spirit of the age*, Ph.D. Dissertation for the City University of New York, 1985, p.12.

The Provenance of 104 Prints by Frank Brangwyn Deposited in the National Museum of Western Art

[Abstract]

Michiko SATO

In 1985, the Tokyo National Museum deposited 104 works by Frank Brangwyn, 86 etchings and 18 lithographs, in the National Museum of Western Art, in spite of the fact that at that point it was unclear why the works had been brought to Japan or why they entered the collection of Tokyo National Museum. This article seeks to demonstrate the provenance of these works through an investigation of extant documents.

The present writer's survey has revealed that the early provenance of these Brangwyn prints is closely related to the activities of Wakun Ishibashi (1876-1928), a painter who studied portrait paintings in England from 1903 to 1918. Ishibashi was friends with Brangwyn and Kojiro Matsukata, a famous Japanese art collector. In 1918, Ishibashi returned to Japan with works by British and Belgian artists for *The Exhibition of European Famous Painters* at Mitsukoshi Department Store, Tokyo. In the exhibition, held July 1 to 10 1918, 53 works by eight British artists and seven Belgian artists were displayed as Part 1 of the exhibition. The 104 works by Frank Brangwyn exhibited as Part 2 are those discussed in this article. Three transportation lists, preserved in the Ishibashi Family papers, provide the evidence of the relationship between Ishibashi and the exhibition. These documents list the works of art shipped from London in three consignments: S/S "KAGA MARU" SHIPMENT (middle of August 1917), S/S "ATSUTA MARU" SHIPMENT (end of November 1917) and S/S "KAGA MARU" SHIPMENT (end of March 1918) in order of date. These lists show the title, artist's name, the materials and the evaluation of the works displayed in the exhibition, and Brangwyn's name is accounted as "Besides/Etching 104 (Brangwyn)" in S/S "KAGA MARU" SHIPMENT (end of March 1918).

The June 1918 issue of the Journal *Mitsukoshi* listed all of the titles of these 104 Brangwyn prints. In the case of the etchings, these titles are direct translations of the original English titles which would subsequently appear in William Gaunt's standard catalogue *The Etchings of Frank Brangwyn: A Catalogue Raisonné*. The running numbers provided by *Mitsukoshi* are largely in accord with inscriptions on the bottom left of the papers.

A further point requires clarification: the overall concept of this exhibition. The correspondence related to Wakun Ishibashi, also preserved by his descendants, includes a letter from George della Faille de Laverghem, the Belgian Ambassador to Japan, to Ishibashi dated July 10, 1918. It is clear from this letter that *The Exhibition of European Famous Painters* was to be a charity event to gather contributions for Belgian refugee artists fleeing from the disasters of World War I. Ishibashi wrote an article about the exhibition in *Shin-Bijutsu* vol. 2, No.7 (June 1918) issue, and *Chuo-Bijutsu* vol. 4, No.7 (July 1918) issue provides the critics' coverage of this exhibition, and both issues noted that charity was the exhibition's principal aim.

According to these magazines and *Mitsukoshi* vol.8, No.7 (July 1918) issue, the works exhibited in Part 1 were sold, while all of the 104 Brangwyn prints exhibited in the Part 2 were donated to the Tokyo Imperial Museum (present-day Tokyo National Museum).

Brangwyn seems to have intended the exhibition as a charity effort for the Belgian refugees. And, in fact the 104 Brangwyn works include the scenes of the ravages of war and images of rural Belgian districts in Belgium, Brangwyn's birthplace. Brangwyn is renowned for his war posters with their clear socialist

message, and some of these images were printed in great numbers as Art Stamps for the Red Cross. Brangwyn's work suggest a sensitivity to the surrounding social situation, more than a purely artistic emotion.

These 104 works reveal Brangwyn's intentions to help the weak, and his voluntary participation in the exhibition indicates his charitable feelings. These prints also show that Brangwyn's works contained two different aspects: a decorativeness primarily found in his mural paintings and a sharp attention to social problems mostly seen in his prints. Reflection on these works will clarify our sense of the important roles played by Brangwyn and Ishibashi in the interactions between Japanese and British art and between Japanese and Belgian art.

***

I wish to express my sincere gratitude to Mr. Shoji Ishibashi for providing me with documents related to Wakun Ishibashi. I am also indebted to Mr. Stephen Coppel, Ms. Janet Wallace, and Mr. David Penn, The British Museum, London; Mr. Mark Evans, National Museums & Galleries of Wales, Cardiff; Ms. Tamae Yoshikawa, University College, London; Professor Toshio Watanabe, Chelsea College of Art & Design, London; for their helpful suggestions in collecting materials.